ヤスクニ通信　No.251　2021 年 2 月 19 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　http://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日　7:00～9:00pm（休日の場合第 4 金曜日）
会場　2021 年より会場は NCC フリースペースに変更しました。（新宿区西早稲田 2-3-18　日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　251

想像力と共に課題を継承する

須田　毅（日本福音キリスト教会連合西堀キリスト福音教会牧師）

今年の当団体の211集会は、講師による講演録画をネット上で視聴いただく形式としました。講師はヨーロッパで生活しながら、日本と日本のキリスト教会の戦争責任の課題について、ひとりの日本人キリスト者としての取り組みを継続している方でした。講演の中で印象深かったのは、講師ご自身の、アジア諸国の日本による戦争被害者との生きた交わりの証言です。戦争がなければ幸福な家庭を築いていただろう東南アジアの御老人のことなど、講師は感情の迫りを覚えながら語られました。聞き手として心動かされ、苦しさを覚えました。

講演の中で、2020年11月に日本の戦争犯罪に関するドイツ人記者によるヨーロッパにおける報告について触れられました。第二次大戦中に日本軍がインドネシアを占領した時期に、日本軍が、同国内のオランダ人女性を強制的に従軍慰安婦としたことが報告されていますが、同時期にインドネシアにて生活していたドイツ人女性たちにも同様な扱いをしたそうです。当時、日本とドイツは同盟国だったにも関わらず、です。講演後に、講師より「日本で当件について、どう報道されましたか」というご質問がありました。ネット検索をし、わかったことは、全国紙での報道はなく、わずかなメディアが取り上げただけということでした。ネット上の記事に共通するのは「『ドイツ人記者による日本の戦争犯罪の報告があった』と、中国あるいは韓国にて、報道されている」というものでした。印象としては、中国や韓国は喜んで当件を報じているが、日本ではその意義があるのかと疑問視している、という雰囲気を感じます。

2014年に、日本軍主導で従軍慰安婦が集められたとする根拠が書かれた著作に捏造部分があるということで、朝日新聞がその著作に基づく報道記事を取り消すという出来事がありました。従軍慰安婦問題における日本軍の関与について明確な証拠はないとされ、誤認による諸報道が日本の国際関係に悪影響を与えたとして、朝日新聞とその周辺に対して大きな批判が生じました。そして、従軍慰安婦問題についての報道の量は格段に減じました。

2014年から6年が経過し、上記のネット検索をして、はっと思わされました。日本軍の関与は明確に認められないとしても、現実に従軍慰安婦とされた方々は存在した、ということが間違いではありません。20年ほど前に、私が韓国を訪問した際、日本大使館前で毎週水曜日に、元従軍慰安婦のご老人が抗議の座り込みをしていました。人生の年輪を感じさせる表情には、多くの悲しみの歴史も刻まれているかのようでした。座り込みをする数人のおばあちゃんを遠くから見ただけですが、それでも戦時下の愚かさや悲しさを、私に瞬時に想像させる、貴重な経験でした。

日本社会の中で、従軍慰安婦問題についての報道が激減することで、その問題は、今は簡単に語られるものではない/語るべきものでないと、私は何も考えもせずに錯覚していたのではないかと、思わされています。諸関係は明瞭でないとしても、戦争犯罪があって被害者がいるのです。社会的雰囲気に無意識に同調し、この問題について語らないことに合わせてしまい、私自身が従軍慰安婦問題に対する関心を薄くする流れを作っている一人ではないだろうかと反省させられています。

第二次大戦下で、戦争の恐ろしさや愚かさ、人間の醜さを直接に経験した方々の発言は、それを知らない私のような世代には重要です。「戦争は人間を不幸にしかしない。それを私は経験した。そのような不幸を経験していない次の世代は、その不幸を繰り返さないように」という素朴な勧めは、ご自身の経験から出るものとしての説得力がありました。迫力とも言えます。ご自身の経験と「平和をつくる者は幸い」という神のことばを伝え、キリスト教会における平和の活動をけん引してきた方々の何名かが、昨年、天に召されました。

その寂しさがあり、また運動を継承することの急所をどこに求めたらよいかの思案を続けています。一次経験としての戦争の悲惨さを知る方々と異なり、悲惨な経験を知らない者たちが運動を継承しなければなりません。経験から語るということは余りに主体的過ぎるという批判もあるでしょうが、戦争の誤りを避けるためには、非常に力強い動機づけになるでしょう。私にはその動機づけとは異なる動機づけが必要なのです。

よく言われることですが、その別の動機づけのためには事実を知ることが重要でしょう。先達も歴史の事実を知ること

を、常に教え続けてくださいました。かつての史実について変更を求めるようなことも起こりえる昨今ですが、諸説を聞きながら、「本当は何が起こったのか」という筋道をたどることはできるはずです。

そしてもう一点思わされるのは、「想像する」ことです。悲惨な戦争を繰り返したくないと、私に強く思わさせるのは、多くの戦争の悲惨についての証言です。実体験としての語りも、聞き語りも、書物も、その出来事の実像は何であったかと想像することへ、私を押し出すのです。あるキリスト者である哲学者は、「愛とは想像すること」と言います。他者の立場に立って、その人物がどのような状況にあり、どのようにその状況を味わったのかを知ろうとし、そしてその人物そのものを知ろうとすることには、想像力が必要です。それは愛でもあります。戦争の悲惨を経験した多くの方々のことが風化されそうなのは、私の愛の欠如も一因です。どんなに悲しい痛みを経験したのかを、粘り強く想像などしないのです。社会的雰囲気が「そんなこと想像するのはやめてしまえ。そんなことは事実かどうか、不確かに過ぎないのだから」と語りかけるとしても、実際に苦しみ悲しみを経験した方々の深い皺を刻んだ表情から、私たちは多くの想像ができるはずなのです。

２０２１年１月１５日例会奨励「私と私の家は主に仕える」
ヨシュア記 24 章 14, 15 節　柴田智悦（日本同盟基督教団横浜上野町教会牧師）

ヨシュアによるヨルダン渡河は、モーセによる出エジプト時の紅海の奇跡よりもある意味で衝撃的でした。このことによってモーセが仕え、ヨシュアが仕えている主に、イスラエルの民も従う思いを新たにしたでしょう。

そうして約束の地に入ったイスラエルは次々とカナンの地を征服していきますが、全パレスチナがイスラエルに服したわけではありません。ヨシュアが老人になってもまだ占領すべき地は非常にたくさん残っていると言われています(13:1)。ヨシュアはカナンの地を各部族に分割し、各部族が相続地を占領していきますが、それぞれ完全に他民族を全て追い出すことができず、なんらかの形で一部の異邦人がユダヤ人たちと共に住むようになるのです。そしてヨシュアの最晩年にあたって、モーセが申命記で告別説教を語ったように、ヨシュアも告別の説教を語ります。それまでの人生を振り返り、主に従うなら祝福があるが、主に背くなら災いを受けることが強調されています。

ヨシュアはイスラエルの全部族をシェケムに集め、契約の更新が行われました。「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、主に仕えなさい」(24:14)。イスラエルの宗教は厳格な唯一神教であるはずなのですが、実際には常に偶像崇拝との戦いでした。彼らは荒野の40年の間でも偶像を担いでいました（アモス 5:26）。

さらにヨシュアは語ります。「主に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶが良い。ただし、私と私の家は主に仕える」(24:15)。ヨシュアは民の指導者として信仰を強要しようとはしていません。信仰生活は毎日の生活の中で決断が迫られます。それは、唯一の神か偶像か、永遠のものか一時的なものか、全能の神かお金か、神中心か自己中心か、そのような決断を毎日の生活の中で下していくことが信仰生活です。ただ、ヨシュアは自分の立場は明確に民に伝えます「私と私の家は主に仕える」。イスラエルの民もヨシュアの問いかけに答えて誓います。「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にあり得ないことです。、、、私たちもまた主に仕えます。このお方が私たちの神だからです」(24:16-18)。しかし、民の答えが本心からではないことを見抜いたヨシュアは、神である主の本性を明らかにします。「あなたがたは、主に仕えることはできない。主は聖なる神、ねたみの神であり、あなたがたの背きや罪を赦さないからである」(24:19)。しかし民は「いいえ。私たちは主に仕えます」(24:21)と再び誓います。ヨシュアは、「主を選んで主に仕えることの証人はあなた方自身です」(24:22)と念を押した上で「今、あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、イスラエルの神、主に心を傾けなさい」(24:23)と勧めます。民は三度目も「私たちの神、主に仕え、主の御声に聞き従います」(24:24)と誓います。しかし、カナンの地に入り、数十年が経とうとしていてもなお、彼らは偶像を持ち続けていたようです。ヨシュアは彼らに、口先だけの誓いではなく、実際に行動で示すよう促しているのです「イスラエルの神、主に心を傾けなさい」と。

実際に偶像を持っている場合とも、心のうちの問題とも考えられますが、「今、あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、イスラエルの神、主に心を傾けなさい」という勧めは、私たちも聞くべき問題です。主に占領していただいた私たちの心の内から偶像を追い出しきれず残してしまっていないでしょうか。

ペテロはアジアに散っている信徒たちに手紙を書いた時「異邦人の中にあって立派に振る舞いなさい。そうすれば・・・あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神を崇めるようになります」（1ペテロ 2:12）と勧めています。私たちも異邦人の中にあって、どのように主だけに従っているか、「私と私の家は、主に仕える」との旗印を明確にさせていただき、私言動を通してたちの信仰を証していきたいと思います。